# 境界地域史研究から考える引揚げ文学論の意義

中山大将

## 1. 評者について：境界地域史研究

評者は樺太[1]移民社会形成史の研究から研究活動を開始し，その成果は拙著『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成：周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』（京都大学学術出版会，2014年）として結実した。それにやや遅れ，2008年からは樺太移民社会解体史の研究も開始していた。ちょうど蘭信三，今泉裕美子などを代表とする戦後の人口移動をめぐる諸共同研究[2]が動き始め，個別の研究者も増え始めた頃であった。しかしながら，それらにおいて引揚げの終了が研究の終点と見られることがよく見られ，日本史出身の研究者においてはそれが顕著であった。評者は研究初期の段階でサハリン残留者に出会うことで，樺太〈戦後〉史という観点から，旧樺太住民の戦後史研究を試みるようになった。

2000年代のロシア側のサハリン史研究は，ようやくソ連史観から脱却し成果を蓄積し始めた時期であったが，それも地域史という観点が主軸にあり，サハリン残留者，とりわけサハリン残留日本人が研究の対象とされることはなかった[3]。なお，評者はポストコロニアルという観点にはあまり実感を抱けずにいる。これは，サハリンは戦後にポストコロニアル国家が新たに形成されたわけではなく，大国ソ連の一行政州になっただけであり，なおかつ住民の大部分が入れ替わっており，〈宗主国からの独立〉のような一般的な意味での〈ポストコロニアル〉を迎えていないからである。しかしながら，そのように考えれば，台湾も，その後に99%の領土と国民を喪失することになるとは言え，大国中華民国の一省となり，〈本省人〉国家は実現せず，満洲・関東州も国民党と共産党による国内紛争としての勢力争いが展開され国家形成は実現せず，〈中国〉としての正統性[4]を宣う中華人民共和国の一地方として統治され，南洋群島も，現在は独立国家が存在しているとは言え，戦後数十年間にわたり大国アメリカの強力な統制下にあった。その意味で言えば，〈ポスト日本帝国〉の時代において，朝鮮のみが，分断国家になったとは言え，ポストコロニアルらしい戦後を迎えた例外的地域と言えるのではないか。このような認識から評者は，東アジア近現代を，〈植民地／帝国〉の〈以前／以後〉という枠組みではなく，大国とその間の周辺地域＝境界地域という枠組みから捉え直すことを試みている。これは時間的縦断性がともすれば欠落する〈植民地／帝国史〉と，地域間横断性が捨象されやすい地域史を補完するものでもある。

文学作品に対して，評者は一貫して，フィクションは資料にしないという冷やかな古典的態度をとってきた。また，職業作家ではなく現場の実務家の言説・思想や充分な自己発信力を持たない当事者の言葉を重視して研究をしてきた。この背景には，戦後開拓史の記述においても，またその研究においても，ある戦後開拓集落に居住していた土地なし農業労働者たちの存在[5]が消されていることを見て，洗練された言葉の群れへの大きな不信感を抱いたからである。そ

うした文学および文学研究者への不信感と無関心を打ち砕いたのは，著者の『帝国の慰安婦：植民地支配と記憶の闘い』（朝日新聞出版社，2014年）であり，その縁で本日はこのような場に座す機会を得るにいたった。本日は，一若手歴史研究者が本書をどのように読んだのかについてお話しをいたしたい。

## 2.「文学」の範囲に関する疑問：手記は文学か

歴史研究者からの文学研究への不毛な批判としては，文学作品はフィクションであり論拠になりえないし，作家は特殊な立場の個人であり社会に対する代表性がないというものがあろう。しかしながら，こうした批判は歴史研究と文学研究とが異なるものを目指し異なるロジックで成り立っていることを充分に認識できていないのではないだろうか。歴史研究にとっての史料が〈事実〉を抽出するための媒体であるのに対して，文学研究にとっての作品とは人間に潜む〈真実〉を読み解くための媒体と言えよう[6)]。それを踏まえた上で，本報告では，歴史研究は文学研究から何を受け取ることができるのかということを考えながら本書への問いかけを行ないたい。

まず，ここで言う〈文学研究〉には，文学史やメディア研究は含まない。これらは作品の中の〈真実〉よりもその周辺の〈事実〉を重視するからである。次に，A. 文学作品の中に社会状況の反映を読み取る，B. 文学作品から社会状況を抽出する，というふたつの作業のうち，原理的にはAは可能だが，Bは不可能だと言うことは文学研究においても了解される事項であるかと思われる[7)]。時折，原理的に不可能なはずのBの作業を行なう文学研究者がおり，こうした誤謬が歴史研究者の反感を買っているようにも思われる。もちろん，歴史研究者の中にも同様の誤謬をおかす者がいるのも事実であり，文学作品が一次史料よりも〈便利な資料〉として拙速に扱われてしまう実情がある[8)]。

「文学」の範囲とはどこまでになるのであろうか。本書では次のように言及されている。

> *何よりも，そのかすかな思いや記憶が刻まれた場所のほとんど，<u>手記を含む</u>，ほかならない「文学」だっただけに，文学研究における無関心こそがそのような忘却に手を貸してきたとの思いをいだかざるを得ない*（12頁，下線引用者）

歴史研究者からするとこの範囲設定には多少の当惑を覚えるのではないだろうか。なぜならば，〈事実〉を記すことが前提の「手記」と，フィクションにより〈真実〉を描くことが前提の小説などは全く質が異なる文字資料群として歴史研究では扱われるべきだからである。もちろん，〈文学研究〉が「手記」を資料として扱ってはならないということを言いたいわけではない。言いたいのは，「文学」を〈人間が書いたもの全般〉と範囲設定してしまうならば，〈作家〉の特権性は融解してしまい，〈作家〉を取り上げることの必然性が消失するのではないかということである[9)]。もちろん，著者自身が「文学」を〈人間が書いたもの全般〉と明確に範囲設定しているわけではないが，「文学」と〈文学ではないもの〉の境界はどこにあるのであろうか。

歴史研究からすれば，いかなる著名な作家であれ〈文字資料生産者〉としては一般の人々と等価であり，その洞察力等と職業作家であるか否かは，相関関係はあっても，因果関係はなく，

作家の書いたもののみを取り上げることに妥当性はないと考えるのが一般的であろう。たとえば,『わが内なる樺太』（石風社, 2008 年）著者の工藤信彦氏は, 文学的素養を存分に持ちつつも, 教育者であり職業作家ではないが（詩人ではあるが), 卓越した知性と文学的感性で樺太と己の関係性について考え抜いた数少ない樺太出身者のひとりである。評者自身の工藤氏への評価はもちろん同氏の刊行著作による部分もあるが, ただただ書き溜めた未刊行の手記や私信, そして氏との対話によるところが多い。工藤氏の思索の価値は作品としての市場性の大小はなんの関係もなく評価され得る。そのような, もちろん肯定的な意味であえてたとえるのであるが,〈ヘンリー・ダーガー〉と歴史研究者は時に出会うことがある[10]。

「文学」と〈文学ではないもの〉の境界線はどこにあるのか。これは,「引揚げ文学論」と〈引揚げ研究〉の境界の所在を問うことでもある。

## 3. 作家の範囲に関する疑問：なぜ李恢成を外すのか

著者に改めて確認しておきたいのは,「引揚げ文学」は〈植民地文学〉の下位カテゴリーなのか, それとも同列カテゴリーなのかということである。つまり「引揚げ文学」と〈植民地文学〉の連続性である。著者がポストコロニアリズムという観念を前提としている以上, 前者であると考えられるが, そうであればなおさら, 以下のことが気になる。

本書では李恢成について次のように位置付けている。

> *サハリンからの引揚げ者, 李恢成がサハリンを舞台とした「砧をうつ女」で芥川賞を受賞したのも一九七二年のことだった。ただし, 李は朝鮮人であり,「国籍国家への帰還」という意味での「引揚げ」には該当しないので, ここでは省いておく。*（35 頁, 下線引用者）

しかしながら, 李恢成のサハリンから日本への移動がサンフラシスコ平和条約発効以前であるならば,「国籍国家」への移動となるはずである。なぜならば, それまでの間, 日本国政府は形式上は李恢成に対して日本国籍を認める立場にあったからである[11]。たとえ, 仮に李恢成が戦前から大韓民国臨時政府の国民証の発行を受けていたり, 戦後にソ連国籍を取得していたとしても, 一度日本帝国の朝鮮戸籍に記載されてしまった朝鮮人は日本からの国籍離脱が不可能であった[12] 以上, このことは変わらない。

「朝鮮人」にとって朝鮮半島は空想上の〈民族の固有地〉であっても, 自己が属する／させられている「国籍国家」の〈領土〉であるとは限らない。本人のナショナル・アイデンティティとは無関係に, 国籍は付与され剥奪される。こうした国民国家制度と国民国家的認識形態そして生活実態が生み出す歪みこそが,〈日帝強占期〉の朝鮮人の, そして戦後は在日朝鮮人の精神的苦悩の一源泉だったのではないか。日本帝国主義下の〈被抑圧民族〉の一員であり, 戦後は〈解放民族〉[13] の一員であったはずの李（とその家族）がなぜ「引揚げ」を経験しなければならなかったのか。そしてそれについて李がどう内省し表現したのか。それは「引揚げ文学論」においては重要なテーマではないか[14]。

*「引揚げ文学」のみならず，すでに「中国残留孤児」という存在が声をあげているが，朝鮮にも「残留孤児」は存在した。（中略）彼らの物語が発掘されたら（発掘されないにしてもその存在への想像力は必要だと思う），そのとき，彼らの文学を読むべきは誰だろうか。*（18頁）

この記述からも，著者が本書において，「引揚げ」経験のナショナル・ヒストリーへの回収を回避しようとしていることは確かである。にもかかわらず，「朝鮮人」であるという理由で李恢成の移動と作品を考察の対象外に置いてしまうことで，〈引揚者〉らが，たとえ〈亜種〉であっても〈日本人〉であることに変わりはないということを承認してしまい，戦後の国境と国民の大再編の中で渦巻き今もなお続いている〈日本人とは誰か〉という問いかけが素通りされ，「引揚げ文学」もまたナショナル文学へと再安置させられ，結果として引揚げ自体がナショナルな経験として回収されてしまうのではないか。

日本人を親に持つあるサハリン残留者は引揚げ港へ向かう列車に家族で乗り込もうとしたところソ連官憲によって降ろされた。父が朝鮮人であることを密告した者がいたのである。そして彼女はその時に初めて自分の父が朝鮮人であることを知ったのであった[15)]。日本人夫婦の養子として育てられ日本人の妻を持ったある残留者は，冷戦期に帰国を希望した際に日本国政府から朝鮮籍であることを指摘されると，自分はずっと日本人として生きてきた，自分の帰る国は日本しかないと訴えた。樺太帰還在日韓国人会の調査によれば，約2割のサハリン残留朝鮮人が帰国先として韓国ではなく日本を希望すると回答している[16)]。評者はこうした〈事実〉を「文学」ではなく，史料や聞き取り調査の中から見出してきた。著者が指摘する帝国の重層性や「反支配」（199頁）の思想を考える契機がここにはあるはずだ。そしてそれ故に，李恢成を，本書の中では取り扱わないにしても，考察対象外にするとあえて述べることは，「引揚げ文学論」において，象徴的な意味で大きな損失ではないかと思えてならない。

## 4. 第II部各論に対する個別評価：「引揚げ文学」の可能性

直接的に文学作品や作家に言及した第II部の各論についての評者の感想を述べておきたい。夏目漱石『明暗』への考察については，上記A型の分析の典型例と言えよう。湯浅克衛『移民』への考察においては，当該作品と第2節以降の接続が不明瞭であると感じた。同節以降は文学作品に宿る〈真実〉を要しない議論ではないだろうか。

小林勝をめぐって，外地生まれ引揚者の内省が，少年の目を〈借り〉て表現され，植民地〈世界〉の〈真実〉が追求されていることを指摘したことは，〈外地見聞録〉とは似ても似つかない「引揚げ文学」の存在を見事に析出している。後藤明生『夢かたり』をめぐって，少年の目から，「植民地の平和な風景のみならず，その背後にある被植民者の敵意や植民者の不安と恐怖を描」（157頁）いていることを指摘し，該作品の構造的特徴に着目している。

*「記憶」の復元に多くのページを割きながらも「記憶」の世界へ誘われる「今」の自己をも注意深く描いているのである。そしてその点にこそ，植民地体験を描く現在の「自己」に無自覚か無関心なほかの回想物語と『夢かたり』が区別されるべき理由がある。*（161頁）

この著者の指摘は後藤の内省の卓越性を証している。

> *戦後に後藤を捕らえていたのは「故郷喪失」の感覚よりはむしろ，植民地で培われた身体感覚のほうであって，後藤はそれがいまでもなお身体を支配していることに対してあくなき好奇心を抱いていた。*（183 頁）

引揚げ文学生産者としての後藤の内的動機をこの指摘は巧みに析出している。これが後藤個人に特有なものなのか，それともある程度一般的に言い得そうなことであるのかは，〈引揚げ研究〉の関心事であろう。小林も後藤も，少年の目を借りることで，〈民族〉だけでなく〈階級〉〈ジェンダー〉からも植民地〈世界〉を表現することに成功していることを著者は指摘しており，そこに，開発近代化論でもなければ，支配／抵抗論でもない「引揚げ文学」の可能性があることを著者は認めている。

## 5. 本書に対する総合的評価：抑圧の相対性と複合性

本書を読む限り，「引揚げ文学」の担い手である作家の内的動機は，自分が生きる世界への違和感や生き辛さにあり，引揚げという〈歴史〉事件の考察にはなく，実のところ極めて個人的で実存的な問題として出発し，そのまま展開，収束してしまったのではないか。司馬遼太郎が戦車連隊でのある経験[17]などを作家活動の内的動機とし，自己の作品を「22 歳の自分へ書いている手紙」[18]と位置付けつつも，歴史を題材に模索され続けたのが〈日本人〉や〈日本〉であり（あるいはそうだと受け止められ），一部からは「国民的作家」[19]として称揚されるに至ったこととは対称的である。

「引揚げ文学」の内的動機は，クイア文学，移民文学などのマイノリティ文学に普遍的なものであろうが，引揚げ経験自体は生死を分かつ切実な問題でありながらも，戦後社会で〈引揚者であること〉は，〈クイアであること〉や〈移民であること〉ほどの切実さや他者性がなかったがゆえに，商業ジャンルとして未確立であり，作家にとってもメイン・テーマにならなかった（あるいは出版社の判断によりできなかった）とも考えることができるのであろうか。

また，「引揚げ文学」には再生産という観念もない。移民はもちろん，クイアも次世代の中に自身の〈同胞〉〈同類〉を見出し得ようが，引揚者にはそれがなく，それ故に思想史的位置付けを含めた〈市場性〉が閉ざされていたとも言えるのだろうか。

一方で，「戦争」や「原爆」とても，将来は別にして現段階において，再生産性はないはずだが，いまだなお〈市場性〉を有している。それはなぜか。日本社会に住む多くの人々が，「戦争」のほうが「引揚げ」よりも将来における〈再発生〉が高いと考えているからであろうか。

さて，歴史研究にとってこの〈序説〉はどう受け止めることができるであろうか。本書が提起した事柄を，一般引揚者の手記やインタビューからも一般化できるのかの検証をすることも，素朴かもしれないがひとつの応答の仕方であろう。ただし一部はすでに進行中であるというのも実態である。本書は，抑圧者／被抑圧者の立場が固定されたものではなく，〈民族〉〈階級〉〈ジェンダー〉などが状況によって様々な個々人の生に違和感や生きづらさをもたらす要因になり〈得

る〉という人間観を示した。それは，抑圧の持つ相対性[20]や，複合性に目を向けたということである。これもまた近年の実証的歴史研究の中でも育まれつつある視点であろうかと思う[21]。それをどう言語化し共有し，社会へ発信していくのかは，文学研究であれ歴史研究であれ，学知に共通する課題であろう。その意味において，評者も以下の著者の考えに大きく同意する者である。

> *九〇年代以降の歴史認識論争において，日韓も左右も合意しうる答えが出ていないのは，戦前の〈帝国〉の重層性が忘却のもとに単純化されたがゆえのことと考えます。そして，十分な考察のないままの否認とひたすらの謝罪の言説のみが対立しあい，国民の思考を単純化させ，忘却が生み出した観念的思考以外は抑圧するにいたっています。*（199頁）

日本であれ韓国であれ自由主義国家における人文社会科学の社会的価値はここにあるはずだ。単純化の誘惑に抗し得る知的体力を鍛え，豊かな対話を蓄積する寛容性を育むこと，その重要性を本書は再認識させてくれた。

若い読者からは，本書に対して〈目新しいことは何も言っていない〉という評価もあり得るかもしれないが，それは本書収録論稿の初出が早いものでは2006年であり，読者自体が最新研究に常に触れ，著者らが創り出した知的営為の前線に常に身を置いているからであろう。戦後開拓集落生まれの我が母は電気も水道もない生活を知っているが，私にとっては，電気も水道もあって当たり前のものであり，無いほうが異常だという身体感覚がある。それと同じことであろう。本書が提示した成果を具体的にどう受け止めていくのかは，評者の今後の研究の中で示していきたい。

（以上）

**注**

1）本稿における〈樺太〉とは，1905年から1945年にかけて日本帝国施政下にあったサハリン島北緯50度線以南の部分とその附属島嶼を指す。〈サハリン〉という場合は，それ以外のサハリン島およびその附属島嶼からなる地域と時代を指す。

2）これらの研究の主な成果として，加藤聖文『「大日本帝国」崩壊：東アジアの1945年』（中央公論新社，2009年），島村恭則編著『引揚者の戦後』（新曜社，2013年），増田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』（慶應義塾大学出版会，2012年），蘭信三編著『帝国以後の人の移動：ポストコロニアルとグローバリズムの交錯点』（勉誠出版，2013年），今泉裕美子ほか編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究：国際関係と地域の視点から』（日本経済評論社，2016年）が挙げられる。

3）評者の言う〈サハリン残留日本人〉とは，実父母のいずれかの本籍地が日本帝国内地および樺太であり，終戦時に樺太ないしは千島に居住し，なおかつ1949年の樺太引揚げ終了時点もサハリンないしはソ連領内（領土の是非は領有権の主張の有無に拠る）に居住していた人々を指している。日本政府の言う「樺太残留邦人」とは若干の相違がある。ロシア側の研究でもこれらの人々について若干の言及がなされている例がある。

4）これは同時に，アジア・アフリカにおいて民族独立・反植民地主義が掲げられ新国家独立が相次ぐ時代においても，多民族国家を維持し，さらには漢族比率の比較的低い地域へ漢族を移住させる〈正当性〉にもなった。

5）NAKAYAMA Taisho, “Agriculture and Rural Community in a Social and Familial Crisis: The Case of Abandoned Rural Community and Invisible People in the Postwar Settlement in Shin-Nopporo, Japan,” (*Asian Rural Sociology*, Ⅳ（Ⅱ), 2010).

6）評者が〈事実〉と〈真実〉という言葉を用いるときに想定しているのは，歴史学者である遅塚忠躬の文学と歴史学の境界をめぐる議論における用法である。たとえば，遅塚はモーパッサンと辻邦生の文学論を事例に挙げて,「文学におけるリアリズムというのは, けっして事実をそのままなぞることではない。リアリズムの作家は，芸術家である限り，その魂によって直覚された真実を，人生についての内的なビジョンとして形にあらわさなければならない。これが二人の一致した意見である。」とし,「文学（歴史小説を含めて）は，歴史学の越えられない障壁を軽々と跳び越えて，事実と論理の世界を越えた真実の世界に入ることができるのである。」と論じる（『史学概論』東京大学出版会，2010 年，319 頁）。

7）もちろん,「手記」にも，意図的かそうで無いかにかかわらず，虚構が含まれる可能性はあり，文学作品でも，虚構に仮託して実際に起きたことを記そうとする場合もあり得るであろう。評者が批判しているのは，後述するように，先行研究や一次史料などによる検討を踏まえず文学作品の中に現れた事象を〈事実〉として示そうとする一部の研究者の態度である。

8）こうした事例については，拙著（『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成』，31 頁）でも批判したことがある。

9）もちろん，職業作家の作品は市場流通が前提となり，書店や図書館などで比較的容易に入手・閲覧できアクセス性が高いという点では，それ以外の書き手に対する特権性は残る。

10）また，職業作家ではなく公務員や新聞記者であった樺太引揚者らの手記の中にも，単なる被害・被抑圧経験の叙述ではなく，また反共・反ソ主義とも距離を置きつつ，ソ連社会主義体制によるソ連人移住者自体の被抑圧性を見出すなどの深い洞察力による記述が見られる（拙稿「旧住民から見たサハリン島の戦後四年間」エレーナ・サヴェーリエヴァ著，小山内道子翻訳，サハリン・樺太史研究会監修『日本領樺太・千島からソ連領サハリン州へ：一九四五年 - 一九四七年』成文社，2015 年）。

11）遠藤正敬『戸籍と国籍の近現代史：民族・血統・日本人』（明石書店，2013 年，231-239 頁）。

12）遠藤正敬『近代日本の植民地統治における国籍と戸籍：満洲・朝鮮・台湾』（明石書店，2010 年，56 頁）。

13）たとえば，以下の 2 人のサハリン残留朝鮮人の発言は，ソ連施政下の戦後サハリンにおける朝鮮人が置かれた立場を考える上で象徴的である。

> *あらためて言えるのは，日本軍国主義圧制から解放されたというサハリン朝鮮人は，なぜ今度は故国へ帰る自由を奪われてしまったのかである。悪辣な日本軍国主義時代の戦時中でもせめて，故国との文通などの面では自由があったではないか。*
>
> *このような矛盾は，ソ連では到底解決されるものではなかった。ソ連軍は，われわれサハリン朝鮮人を日本軍国主義者の手から奪い取っただけだといった方が，真実に適合した表現と言えそうだ。*（李炳律『サハリンに生きた朝鮮人』北海道新聞社，2008 年，111-112 頁）

> *戦後にね，ロシア人たちが日本から私たちを解放しましたよと。解放したって意味がわからないって，お父さんはわからないって言いました。何から誰を解放したのかって，日本時代はそれでも，朝鮮人は自由に歩いたんですよ。どこでも行きたいところに。ところが，ロシア人が来てからね，何もみんなどこに行くにでも，自由に歩けなかった。自由を失った人たちがね，誰が誰から，誰に解放したのかって。わかりません，て。*（拙稿「韓国永住帰国サハリン朝鮮人：韓国安山市「故郷の村」の韓人」今西一編著『北東アジアのコリアン・ディアスポラ：サハリン・樺太を中心に』小樽商科大学出版会，2012 年，280 頁）

なお「自由に歩けなかった」と言うのは，ソ連施政下のサハリンでは無国籍者扱いを受け，当局への

届け出無しには住民登録地から一定距離以上離れることを許されなかった時期のことを指している。

14）なお，本書には収録されていないものの，著者が引揚げに関心を持ち始めた初期の段階で李恢成について論じた別稿を発表しており，その分析と批判を通じて「移動させられる人々」だけではなく，「移動物語が一種の権力になっていくこと」（201頁）へも関心を持つようになるなど，著者の研究全体としては李恢成を素通りしているわけではないことは書き添えておく。

15）拙稿「サハリン残留日本人：樺太・サハリンからみる東アジアの国民帝国と国民国家そして家族」（蘭信三編著『帝国以後の人の移動：ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』勉誠出版，2013年，748頁）。

16）拙稿「サハリン残留日本人の冷戦期帰国：「再開樺太引揚げ」における帰国者と残留者」（『移民研究年報』第20号，2014年，9-10頁）。

17）本土防衛戦において街道が避難民で埋まる状況になった場合，戦車連隊はどう移動するのかという将校の質問に対して参謀が「轢き殺してゆく」と回答したこと（司馬遼太郎「百年の単位」『中央公論』第79巻2号，1964年，330頁）。

18）1991年に司馬遼太郎が文化功労者に選出された際の記者会見での発言。映像は「戦後史証言プロジェクト 日本人は何をめざしてきたのか 2014年度「知の巨人たち」第4回二十二歳の自分への手紙～司馬遼太郎～」（『NHK戦後史証言アーカイブス』 http://cgi2.nhk.or.jp/postwar/bangumi/movie.cgi?das_id=D0012200027_00000［最終閲覧：2017年3月17日］）より閲覧。

19）たとえば，産経新聞は没後20年に行なわれた司馬遼太郎展について「司馬遼太郎展スタート　没後20年，国民的作家の原点に触れる」と見出しを打っている（『産経WEST』2016年10月22日発信 http://www.sankei.com/west/news/161022/wst1610220034-n1.html［最終閲覧：2017年3月22日］）。

20）ここで言う〈相対性〉とは〈どちらがより苛酷な抑圧を受けていたか〉という程度の大小の比較ではなく，抑圧／被抑圧関係が状況によって反転したり，被抑圧者が同時に抑圧者でもあり得るということを指している。

21）率直に述べれば，引揚げも含めた東アジア戦後史研究の最新の成果がより多く反映されれば，本書はより魅力的になったはずである。もちろん，本書は「序説」であり，今後この分野をいかに発展させるかは，著者のみならず評者も含めた関連分野の人間にとっても大きな課題である。